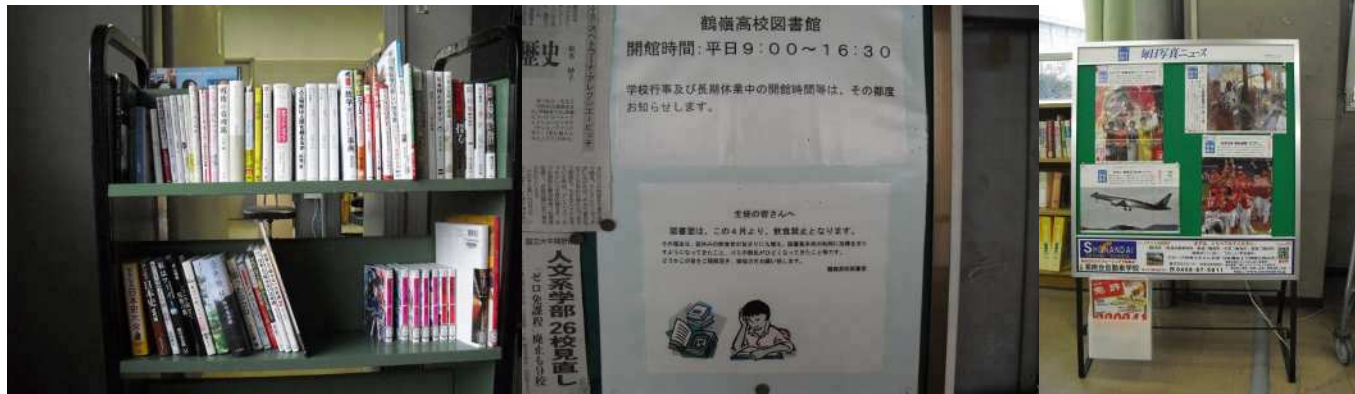




※ “つるみん” 平成26年度第38回鶴嶺祭『ゆるキャラグランプリ』でグランプリを受賞。1年2組小山田夏芽さん、鬼塚麻未さん（旧クラス）の作品で、その思い（願い）は、3つ。・「世界中を飛んで、鶴嶺の名を広めている鶴」・「好きなものは笑顔と思いやり」・「鶴高生と協力して、世界中を笑顔にするのが夢」です。

先月、図書委員と“選書ツアー”に行きました。全員が無事に揃って本を購入し、学校に届き、本を鶴嶺の図書館の蔵書にする、一つ一つのプロセスが大好きです。何故ならば、他の人の選んだ本は、私には決して選ばない本もあるからです。ですから、楽しいイベントです。購入本をぜひ見に来てください。

司書



◆ジュンク堂書店購入整備中です。

◆図書館は飲食禁止です。守ってください。

◆館内にある毎日写真ニュース。

今月のおすすめ本 (司書 ver.)

『しげちゃん』 室井 滋【著】長谷川義史【出版社】金の星社 (鶴嶺所蔵)

女優の室井滋さんの本当にあったエピソードを絵本にしています。名前から苦勞した体験です。親の想いがあるかもしれませんが、一生お付き合いする名前で苦勞するんですね。できれば、将来のために一読してみは？

学生時代に読んだ本

4 5 6 7 9 10 11 **12** 1 2 3

私が薦める本はおもしろくない

中学生のころは、いや正確に言うと高校2年まではまともに読書はしなかった。高校1年のときには読書感想文のために推薦図書から一番薄い文庫本の『野菊の墓(伊藤左千太)』を読んだ。「だから何?」と思ったが、先生に叱られない程度の無難な感想文を書いた。2年のときは夏休みの課題だった漱石の「こころ」を読んだが、恥ずかしい話、このとき小説と現実との区別もつかず、社会現象を分析するような間抜けな感想文を提出したことを覚えている。

さて、2年の秋からは猛烈に本を読みだす。きっかけは友人が提案した『岩波新書百冊読破競争』。図書室の岩波新書百冊をどちらが先に読み終えるかというたいわいもない競争。最初に読んだのは「権威と権力(なだいなだ著)」。なぜこれから始めたかは覚えていないが、なんだか大人の世界を覗いたようで、ちよつと賢くなった気がした。その後も読み進んだが、冊数よりもその知的世界に興味を持つようになった。そして、3年の夏頃にその競争もいつしか立ち消えとなった。(その友人と疎遠になり、40冊くらいでお互いに報告はやめてしまった。)このとき読んだ本のすべてが面白かったわけではないが、この競争のおかげで読書が身近になり、知識の世界は確実に広がった。

また2年の冬頃からは現代文(小説)入試対策のために「名作文学作品」も徹底的に読みまくった。夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、芥川龍之介、川端康成…。受験のために読んだとは言え、どれも正直言ってその価値がよくわからなかった。ただ読んだだけ。読解力や漢字力はいったいのかもしれないが、感動したり、人生を変えるような経験にはならなかった。

大学では英文学専攻だったが、その英文学を原作で読破する英語力もなく、ひたすら翻訳本を読み漁った。こちらの印象も一部を除き同様だった。(ただ英語で学ぶ英文学の授業は最高に楽しく、文学の世界を学び、英文学を専攻して本当に幸せだった。)

さて、私は自分の読書経験から感じたのは、「他人が薦める本はまず私には面白くない。私が薦めた本は他人から面白いと言われたことがほとんどない」ということだった。

本の内容が面白いと思えるかどうかは、その人の人生経験や興味の対象によって大きく異なるものだ。映画や音楽や学問や恋愛対象と同様に、誰もが好きになるものやこれが正しい答え、というものは存在しない。ただ言えるのは、時を忘れて一気に読みたくなる本、感涙にむせぶ本、明日から生き方を変えたいくなる本、幸せな気分になれる本は必ず誰にもある。そんな本に巡り合うためにはたくさん読まなければ出会えない。十冊読んで一冊出会えればよい方だ。読書が続ければ、いつか自分の一生を左右するような、何回でも読み返したくなるような、著者に感謝の気持ちを伝えたいくなるような、そんな素晴らしい本に出会えたら。その本はあなたに至福の時を与えてくれるだけでなく、いつか辛いときにあなたを支えてくれるだろう。だから、だから、沢山、沢山、本を読んではい。